



## イスラーム研究と「東西」という世界認識枠

著者	小田 淑子
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	45
ページ	35-40
発行年	2012-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/7300">http://hdl.handle.net/10112/7300</a>

## イスラーム研究と「東西」という世界認識枠

文学部比較宗教学専修 小田 淑子

日本人は東西という用語に違和感をもたないが、日本のイスラーム研究者はこの世界区分に疑念を抱き、特にグローバル時代にその有効性を疑問視せざるをえない。この問題意識に基づき、ヨーロッパの世界区分と日本人の「東洋」認識を考察してみたい。それは、20世紀後半のオリエンタリズムに対するイスラーム知識人と日本仏教研究者の反応の相違とも関連している。

近代ヨーロッパは非西洋の他者を(1)文明と未開、(2)西洋と東洋、さらにヨーロッパ内部で(3)アリアとセム、この三種類に区分した。ヨーロッパ列強は未開地域を植民地化したように、当時のアジアはヨーロッパにとって未開地域にはかならなかった。東洋学は聖典や諸文献をもつ古代東洋の高い文化の研究で、ヨーロッパにとって「東洋」は異質で魅力ある古代文明という意味と、同時代の野蛮なアジアという両義性をもっていた。同時代のアジア文化は、他の未開の文化や宗教と同様に、民族誌、文化人類学で研究され、東洋学と時代的には並行して、すみ分けされて研究された。

問題は日本人による「東洋」という語の使い方にある。植民地支配を受けなかった日本は西洋への憎悪はなく、西洋は目指すべき近代の同義語だった。「脱亜入欧」が示唆するように、日露戦争後の日本は「未開のアジア」ではなく、欧米と対等、少なくともそこに近づいたと自負し、日本自身が「未開のアジア」を蔑視し支配する側に立った。欧米にとって古代の高度文明だった「東洋」を日本は現在の日本に適用した。

オリエンタリズムへの反応も、日本仏教とイスラームでは顕著に異なる。イスラーム知識人は欧米の「野蛮なオリエン」への侮蔑の眼差しを鋭く意識して激しく反発した。だが日本仏教は近代的仏教研究をヨーロッパの東洋学から導入し、日本の大乘仏教が他のアジア地域の上座部より優れていると主張した。それはヨーロッパにおけるキリスト教によるユダヤ教の乗り越え論と類似する。

東西という概念で認識された日本人の世界観からイスラーム世界やアフリカなどが欠落したのは当然である。明治時代にはやむをえなかったとしても、グローバル化が強く意識されている今日において、この東西という認識の時代錯誤が問題にならない理由を今後さらに探ってみたい。

## イスラーム研究と「東西」という世界認識枠

文学部比較宗教学専修 小田 淑子

## はじめに

東西学術研究所創立六〇周年を記念するシンポジウムで、「東西」という用語を批判すること  
にためらいもあるが、東西（東洋・西洋）という概念ないし世界区分に違和感を覚える人々も  
いる。世界各地から多様な研究者が本研究所を訪れ、アジアと欧米に限定しない研究が行われ  
るのであれば、東西という名称の妥当性を検証すべきではないかと考え、このテーマを選んだ。

日本、中国、朝鮮半島など東アジア地域および仏教を研究対象とする日本人研究者にとって  
東西という名称は馴染みがあり、便利でもあり、違和感を抱くことはないだろう。だが、日本  
におけるイスラーム研究者は東西という世界・文化区分に疑義を感じる。ヨーロッパ人はイス  
ラームを明らかに異質な他者と認識し、東、オリエントの典型に位置づけ、現在もそうである。  
日本人はヨーロッパでの区分を安直に受けいれて、イスラームを「東」に入れるが、自分たち  
と同じ「東」だとは認めず、キリスト教と同じ一神教なのだから、むしろ西洋に近いと漠然と  
感じている。日本においてイスラームは東西の枠組みでは確固とした位置をもたない。アフリ  
カやラテン・アメリカなどの先住民たちはヨーロッパの植民地支配と闘い、独立を獲得した。  
この経緯を考えると、たとえ公用語が英語やポルトガル語で、キリスト教徒であっても、彼ら  
は西、西洋に位置づけられることを望まない。むしろ彼らは東洋ではなく、ムスリム以上に自  
分たちの位置づけに戸惑い、東西の区分に異議を申し立てるだろう。ムスリムも中東、パキス  
タン、東南アジアのみならずアフリカなど民族と言語の異なる人々である。現代のヨーロッ  
パとそれ以外の諸地域、諸民族、異文化の関係であり、単純な西洋と東洋の枠組みは通用しな  
い。

この現状を踏まえ、第一に、ヨーロッパにおける東洋と西洋という区分、世界認識／他者認  
識や学術分野の成立を概観する。その認識枠を日本人が用い始めたときに、どういう問題があ  
ったのか、なぜそれが今も使われるのかを考えてみたい。第二に、エドワード・サイードによ  
るオリエンタリズムに対する反応ないし感度が、日本とイスラームやインドで顕著に異なる。

この点も合わせて考えてみたい。

### (1) 東洋とアジア

15世紀末に始まった大航海時代以後、ヨーロッパの地理的な世界認識は徐々にではあるが、ほぼ全世界に及んだ。ヨーロッパは非西洋の他者を(1)文明（旧世界）と未開（新世界）、(2)西洋と東洋、さらにヨーロッパ内部で(3)アリアとセム、この三種類に区分した。まず確認すべきことは、ヨーロッパの世界区分は文明と未開が顕著な区分であり、西洋と東洋は唯一の世界区分ではなかったことである。ヨーロッパ列強は次々に発見した「新世界」を植民地化し、文明化・キリスト教化した。アジア各地にも植民地支配が及んだように、当時のアジアはヨーロッパにとって未開、より正確には古代に高度な文明を誇った地域も、その後停滞し、後退した地域にはかならなかった。ヨーロッパにとって「東洋」はヨーロッパとは異質の文化、文明という意味と、同時代の野蛮なアジアという両義性をもっていた。

ヨーロッパにおいて18世紀ごろから東洋学が盛んになった。東洋学とは、聖典や諸文献をもつ東洋文化の研究一般であり、主にインドと中国、古代イラン、イスラームに関して、言語学、文学、歴史、宗教思想、哲学等の研究が行われた。東洋学の対象としての「東洋」はヨーロッパ人にとって異国情緒や、時には憧れさえ感じさせた。とりわけ古代インドは印欧祖語を求める関心と相まって情熱をかけて研究された。この意味での「東洋」は、文明と未開（旧世界と新世界）の区分からすれば、文明（旧世界）の一部だった。東洋学は当時のヨーロッパにとって古代東洋の高い文化への積極的関心を示したが、同時代の停滞し、文化的に劣勢にあるアジア、文字文化を持たない少数民族の文化には関心をもたなかった。東洋学の一部としての仏教研究はサンスクリットとパーリ語仏典の研究であり、同時代のアジア諸地域の仏教研究ではなかった。未開の文化や宗教は民族誌、文化人類学で研究され、東洋学と時代的には並行して、すみ分けされつつ、世界の諸宗教の知識がヨーロッパに蓄積されていった。そして、植民地統治に必要な言語、文化、法律や社会制度も研究もされ、その一部は東洋学と文化人類学に属した。

西洋はヨーロッパ人による自己認識であり、その上、ヨーロッパも民族言語は多様だが、一部を除いて大半はアリア系であり、一時期はローマ帝国の領土だったため、ギリシャ・ローマ文化とキリスト教とを継承して共有してきた。ヨーロッパ列強と新興国アメリカ合衆国（以下欧米と略称）が自分たちを西洋と呼び、明らかな優越意識をもち武力によって世界各地を植民地支配した。実際に、近代化が西洋化と呼ばれるように、西洋は近代（近代国家、近代社会、近代性）とほぼ同義語としても用いられている。この点で、西洋という用語、概念は今日でも

有効である。

その中でユダヤ人は少数派として存続し、近代以前には、ヨーロッパ各地でユダヤ人共同体を形成して一定の自治を保っていた。ヨーロッパで近代国家が成立し、ユダヤ人も市民として扱うことをきっかけに同化ユダヤ人が増加したが、同時に、それに反発するユダヤ民族主義であるシオニズムも生じた。19世紀ごろには言語学が発展し、アーリアとセムとの区別が強調され、ユダヤ教に対するキリスト教の優位の論調と重なってユダヤ人への差別も強調された。

東洋はアジア人の自己認識に基づく自称ではなく、ヨーロッパ人によって与えられた他称であり、言語、民族、宗教、文化において西洋よりはるかに多様でまとまりはない。欧米では、今日も中東から東アジアを東洋に区分するが、アフリカを東洋に含めることはない。問題は日本人による「東洋」という語の使い方にある。日本は植民地支配を受けなかったため、西洋への憎悪はなく、憧れの対象であり、西洋は目指すべき近代の同義語だった。同じ理由で、日本人が用いる「東洋」は欧米による呼称「東洋」に由来することは言うまでもないが、欧米から蔑視された「未開のアジア」ではない。近代的な科学技術では遅れており、西洋とは異質だが、西洋と対等あるいは潜在的には乗り越えうる成熟した文化をもつ地域という意味で用いられた。つまり、日本は西洋近代の受容に積極的だったが、「西洋」からキリスト教を見事に除外して西洋化を達成しようとした。日本人の「東洋」は東洋学の「東洋」と同じで、中国と、仏教誕生の古代インドには親近感をもったが、同時代のインドやタイなどの仏教圏にもほとんど関心をもたず、ましてイスラームへの親近感も関心も低かった。「脱亜入欧」と言われたように、アジアの一角に位置しながら、特に日露戦争に勝利した後の日本は「未開のアジア」ではなく、欧米と対等、少なくともそこに近づいたと自負し、日本自身が「未開のアジア」を蔑視する側に立った。「大東亜」戦争は建前は東アジアの連帯であっても、実質的には欧米に代わる覇権を掌握しようとした。

ヨーロッパの東洋学が古代アジアの高度な文明に限定しがちだったのに対して、日本では現在の日本を高度な文化である東洋とみなした点が異なる。同じ東アジアに位置し、一時期日本による植民地支配を受けた韓国や、国内に多数の少数民族とムスリムを抱える中国が「東西」や「東洋」という語をどのように使ってきたのか、調べて比較してみたい。

日本人の「東洋」は実質的に限定的な地域しか含まず、意味内容からすれば「高度な文化をもつ東洋」であったにもかかわらず、日本人は明治時代に世界を東洋と西洋に二分して捉えた。世界史（外国史）を西洋史と東洋史の二分化で済ませているように、唯一の世界区分として用いた。歴史学としては、どの国もそうであるように、自国の歴史は特別扱いであるから、国史（日本史）があり、上記に説明してきた日本人の「高度な文化としての東洋」は、意味的には日

本史に組み込まれ、西洋史と東洋史との二分化における東洋は「未開のアジア」とその他の未開を大まかに一まとめに扱ったというべきだろうか。当時の世界認識ではやむをえなかったとしても、第二次世界大戦も終わり、その区分がなぜ今日まで残ったのだろうか。とりわけグローバル化が強く意識されている今日において、この東西という認識の時代錯誤が問題にならないことは不思議であり、問題である。東西という概念で認識された日本人の世界観からイスラーム世界やアフリカなどが欠落しがちだったのは当然である。欧米のユダヤ人についても同様で、近代欧米文化の中で育ちつつも、キリスト教ではないユダヤ教への帰属意識をもつユダヤ人への感度は鈍い。

## (2) オリエンタリズムの射程

オリエンタリズムはエドワード・サイードの著作（1968年）によって知られるようになった問題である。要点は、近代ヨーロッパで成立した東洋学のように政治や武力による侵略・征服とは直接に関係のないと思われていた諸学問も学術的客観性や中立の立場ではなく、「野蛮なオリエント」という予断に基づく偏向をまぬかれていないことを厳しく断罪したものである。サイードはレバノン出身の比較文学の専門家であり、イスラーム研究者ではないため、彼のイスラーム理解やイスラーム研究の知識は十分ではない。日本が東アジア中心の東洋を前提しているのに対し、サイードはイスラーム世界を中心にオリエントを考察するため、インドから東アジアの理解が不十分である。オリエンタリズムは時期的にも、ポスト・コロニアリズムと前後して生じ、ヨーロッパが近代以後に行った植民地支配への批判が人文系の諸学問、特に文化人類学と東洋学の系譜の学問に及んだ。この批判は一時期は欧米での業績の全面否定のように激しかったが、だからといって真に新しい学問を生み出したわけではなく、最近ようやく19世紀や20世紀の欧米の業績を批判しつつも評価するにいたっている。

イスラームは東洋学の研究対象であったが、インド研究や中国研究に比べると、ヨーロッパにとってキリスト教と同じ一神教のイスラームへの関心は高くなかった。ヨーロッパ人が同時代のイスラーム世界を他のアジア地域と同様に劣等文化と見ていたことが、ムスリムにとってイスラーム全般への蔑視に他ならず、それへの激しい反発があった。イスラーム世界も日本や中国、インドと同様に、東洋学の対象としての「東洋」と、「停滞したアジア」の二重性を付されていたが、イスラーム世界では「野蛮なオリエント」への侮蔑の眼差しを鋭く意識して反発した。その主たる理由は、中東全域ではないが、相当な地域が植民地支配を受けたことにあるだろう。また、イスラーム成立当初からイスラームの拡大はビザンツ帝国を侵略して崩壊させ、イベリア半島でも攻防を繰り返した歴史から、ヨーロッパによるイスラーム敵視が根強かった

ことも一因だろう。

最後に、近代における日本の仏教研究とイスラーム世界のイスラーム研究を対比しておきたい。日本は明治時代になって、まず近代的な仏教研究をヨーロッパのインド学、仏教学を学び導入していった。ビュルヌフはサンスクリットに通じ、大乘仏典と上座部仏典を比較し、上座部仏教が釈尊の仏教に近いとして高く評価した。この点で、日本仏教は低く評価されたのだが、日本はそれを理由にヨーロッパの仏教学を批判することはなかった。マックス・ミュラーに学んだ高楠順次郎などは仏教思想内容以上に、文献批判の方法論を学んだ。その後の日本の近代的仏教学は、大乘仏教が上座部より優れていること、他のアジア地域の仏教に比べ日本の仏教が優れていることを多くの研究によって示したが、その研究は直接に欧米に向けて発信され、欧米の研究と対決したというより、日本国内向けだった。ちなみに、ヨーロッパの仏教学も古代の仏典研究中心であり、日本人による仏教研究もまた、当時の日本仏教の寺院のあり方には言及せず、漢籍仏典とサンスクリット仏典の研究、および著名な仏教思想家の著作に基づく仏教教義の研究だった。

イスラーム世界では、サイド以前から、たとえばルナンのように顕著なイスラーム蔑視のイスラーム研究への反感と批判があった。ちなみに、ルナンの偏向はヨーロッパ内部におけるアリアとセムの区別にも関連して、セム語族に属するイスラームもユダヤ教とともにキリスト教から低いものとみなされたことにもよる。非ムスリムによるクルアーンやハディースという規範的文献の文献学的研究に対してもムスリムによる批判が行われていた。これらの背景もあり、イスラーム世界およびイスラーム研究者の間ではオリエンタリズムは様々に議論された。イスラーム知識人が欧米のイスラーム研究に対して反発した一つの理由は、イスラームがキリスト教と同じ一神教であり、イスラームの自己理解としては、イスラームがキリスト教より完璧な啓示を与えられているという自負があったことだろう。過去において実際にイスラーム世界が学術面でも科学、建築などの文化面でも先進地域だった。その自負にもかかわらず、近代において、日本と異なり政治や社会制度の近代化を手早く進められない状況への苛立ちもあっただろう。イスラーム世界は欧米に対して攻撃的な姿勢を示してきた。

日本仏教とイスラームは宗教と社会の関わりおよび歴史意識の強さの点で大きく異なる。この相違がヨーロッパの学問に対する反発の仕方の相違にも反映されていると考えられる。この問題については、後日、改めて詳細に検討を加えたい。